65号

愛鳥教育

2002.5

全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育　No.65
2002.5

目　次

研修会報告
～小学校での野外学習プログラムを考える～
『第２回 環境教育研修会
in YOKOHAMA』を通して ---- 堤　達俊　3

「とやまバードウォッチング」 ---- 林　梅夫　11

バードカービングを
鳥の保護に活用する ---------- 内山春雄　14

もりまき通信(15)
テレビでバードウォッチング ---- 森　真希　16

書籍紹介
『移入・外来・侵入種
－生物多様性を脅かすもの』 ---- 箕輪多津男 18
『谷津干潟を楽しむ
干潟の鳥ウォッチング』 ---------- 箕輪多津男 19
『歌集　白鳥聖歌』 ---------- 島田利子　20

テロや戦争という名の
野生生物への脅威 ---------- 箕輪多津男 22

編集後記 ---------- 23

研修会報告

～小学校での野外学習プログラムを考える～

『第２回 環境教育研修会 in YOKOHAMA』を通して

常務理事　堤　達俊

１．研修会実施の目的

横浜市立小学校では、野島公園（金沢区）、こども自然公園（旭区）、三ツ沢公園（神奈川区）、上郷市民の森（栄区）などにある宿泊施設を使って、主に４年生で宿泊体験学習を行うことが多い。

そこで、本会では、2000年５月に横浜市金沢区野島公園において「小学校教職員のための環境教育研修会@野島」を開催し、環境教育の視点から宿泊体験学習のあり方を見直し、その場の自然環境を生かした宿泊体験学習のプログラムを提案した。

その成果を踏まえ、2001年５月に、横浜市で、やはり多くの小学校が宿泊体験学習に利用する場所である「こども自然公園」において、環境教育研修会を行った。

前回の野島での研修会では、「海」という環境を生かした研修会であったが、今回は横浜の原風景である「谷戸」という環境を生かした野外学習プログラムの研修を目的とした。

これまで、こども自然公園で宿泊体験学習を行う場合、その広大な敷地を生かし、オリエンテーリングを行う例が多く見られた。しかし、横浜の原風景である「谷戸」の自然に着目し、それを生かしたプログラムが計画されることはあまりなかったように思われる。

そこで、まず、指導者である小学校教職員が、横浜の原風景としてのこども自然公園の谷戸の地形や自然に実際に触れることで、宿泊体験学習のプログラム立案の仕方を見直すだけでなく、自分の学区の自然や地域を見直すきっかけになることを願い、本研修会を計画した。

前回は、宿泊という点にも重点を置き、夜間プログラムについてもいくつかの提案を行ったが、宿泊を伴う研修ということが逆にネックとなり、研修会への参加者がやや少なかったので、今回は日帰り研修として計画した。

2．こども自然公園について

こども自然公園は、「大池公園」とも呼ばれ、横浜市の中央部にある標高60m～90mの起伏に富んだ丘陵の地形を生かした45.5haの横浜市内最大の公園である。ここには、江戸時代に造られた大きな溜池・梅林・桜山・ちびっこ動物園などがあり、広く市民に親しまれている。また、公園の一部は立入禁止区域となっており、生息する動植物の保護区となっている。

公園には四つの谷戸があり、その一部はゲンジボタルの自然発生地でもある。その「ホタルとその生息地」は、平成4年6月8日に横浜市の指定天然記念物に認定され、その約9haが文化財保護区域となっている。毎年6月中旬にはゲンジボタルが飛び交い、多くの市民が鑑賞に訪れている。

3．当日の流れ

公園の様子がよくわかり、オリエンテーリングなどをする場合にも応用しやすいように、公園を歩いて一回りするようなコースを設定した。その途中で、主に谷戸やその周りの自然が色濃く残されている場所を選び、テキストを使いながら研修を行った。

4．テキストの解説

(1)　ドバトに学ぶ恋のテクニック

ドバトは、横浜市ではほとんどの地域で見ることのできる身近な「野鳥」である。警戒心が薄いので、双眼鏡がなくても比較的その生態を観察しやすい。また、一年中繁殖が可能なため、ある程度の個体数の群の中には必ずと言って良いほど求愛行動をしている個体を見ることができる。その様子は、見ているだけでも楽しく、子どもたちも関心を持ちやすい。また、ドバトは、地面を歩き回るので、河原では放置されたテグスの被害に遭うことが多い。人間の与える餌がドバトの繁殖を助長していることからも、人間と野鳥とのつながりを考える良い教材にもなり、総合的な学習で取り上げる価値も高いと考える。

このような観点から、ドバトは、バードウォッチングの初歩の段階で取り上げる種として、有効なものの一つだと考えられる。

環境省自然環境局発行のパンフレット「ハトとのトラブルがおきています　エサをあげないで！」*を活用すると効果的である。

*「ハトとのトラブルがおきています　エサをあげないで！」
発行：環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護業務室
〒100-8975　東京都千代田区霞が関1丁目2－2

編集：（財）日本鳥類保護連盟
〒166-0012　東京都杉並区和田3－54－5
第10田中ビル3F

(2)　隙ありっ！　名漁師ダイサギの不思議な動き

ダイナミックな採餌行動を観察することができるのは、野鳥観察の良さの一つと言ってよいだろう。実際、野鳥の行動の巧みさに驚かされることが多い。特に、サギのような大きな野鳥は、餌も大きいので観察しやすい。そのため、野鳥と餌となる生物のつながりについて考えることをきっかけに、食物連鎖や生態系へと考えを深めることもできる。

さて、研修会当日は、残念ながら、普段大池で見る機会が多いダイサギの姿が見えず、代わりにアオサギが静かにたたずんでいるだけであった。それでも、池や川などの水辺には必ず野鳥が集まり、観察者の期待を裏切ることは少ない。今回も、美しいカワセミの雄が参加者の目を楽しませてくれた。

オリエンテーリングなどにバードウォッチングを採り入れたいのであれば、池や川などの水辺にポイントを設定しておくと、高い確率で野鳥に出会えることだろう。

(3)　池の困り者「ミシシッピアカミミガメ」

総合的な学習の時間への取り組みが始まると共に、各学校では、環境教育を取り上げる機会がぐっと増えてきた。しかし、そんな状況の中で、移入種の取り扱いに配慮が欠けることも多いようだ。ケナフ、ビオトープをはじめ、この問題については十分な配慮が必要となってくる。

ケナフは日本原産のものでないため、帰化した場合の生態系への影響が心配されている。また、ビオトープでは、その管理の難しさと共に、移入種による生態系の混乱を招くおそれがあるとも言われている。

その問題に触れるために、今回は、子どもたちに身近なミシシッピアカミミガメ（ミドリガメ）を取り上げた。学校の環境によっては、ブラックバスなどの外来魚を通してこの問題に迫るのも良いと思われる。

最近出版された、『ちょっと待ってケナフ！これでいいのビオトープ？』（上赤博文著・地人書館刊・1800円）も、これらの問題を指摘しており、ぜひ読んでおきたい一冊である。

(4)　最近、あまり話題にならなくなりましたが……。

(2)において、水鳥が、その観察のしやすさからバードウォッチングの初心者に向いていることは述べた。バードウォッチングをしていると、よく観察される種類についての子どもたちの興味の低下は、どの指導者も経験なさっていることと思う。そこで、単に見るだけでなく、見たことをスケッチすることを取り上げた。

以前の『愛鳥教育』で、平田寛重氏が水鳥を教材として開発したプログラムを紹介しているが、絵を描くことにより、その野鳥の形態や行動を細かく観察できる。本会でも、以前、小学校の教師を対象に小学校４年理科「季節と生き物」を題材に研修会を行った折り、実際にカモの形のイラストに色鉛筆で彩色をするという活動を行ったことがある。そこでも、

「今まで見慣れていたコガモだったが、実際に色を塗っていると、初めて気付くことがいっぱいあって、自分自身、驚かされた。」

という声が出された。

絵を描くことに抵抗のある場合は、このようにカモの形を書いたものに「ぬり絵」をするという活動を行うだけでも、細かいところまでしっかり見るという力を養えるようになる。

(5)　谷戸田は横浜の原風景だ！

谷戸は、その起伏のある地形から、湧水が豊富だったり日照の変化があったりする。そのため、豊かな生物相を生み出している。

横浜には、「谷戸」の地名がついたところがあちらこちらに見られる。しかし、宅地開発などで、そこの本来の地形が谷戸であったことがわからなくなっている場合もある。そこで、谷戸とそれを取り巻く自然を生かした「こども自然公園」をもとに、横浜の原風景に思いを寄せ、「自分たちの学校の環境は本来どうなっていたのだろうか」と考える機会になればという願いでこの研修会を行った。

宿泊体験学習や移動教室を行う場合、自分の学校と体験学習を行う場所の環境について比較しながら考えることは、とても大切なことだと思う。特に、その二つの環境が似通っている場合は、比較もしやすく、その違いについて考察しやすい。

それによって、自分たちの住むまちの環境の良さに気付かせたり、まちをより良くしていきたいという意欲を持たせたりすることができる。

(6)　気をつけよう！　危険な生物

子どもと野外に出る時、やはり指導者として気をつけなければならないのは安全管理である。

植物についても、相手から攻撃してくることがないので危険と感じにくいが、知らないで触るとかぶれるものから、口にすると生命に関わるものまで幅広くあるので注意が必要である。

こども自然公園は、谷戸という身近な自然環境のため、そこで見られる植物は学校でもお馴染みのものが多い。しかし、実際に知識がないと、その存在を知ることなく、子どもたちを危険にさらしてしまうことも起こり得る。そこで、本研修会では、身近な危険な生物（個人的にはこの言葉はあまり好きではないが）について実際に観察することにした。

植物以外では、小動物に毒を有するものが少なくない。動植物に触れたら手を洗うという基本的な習慣を身につけさせたい。

(7)　さびと油！　不法投棄か？

谷戸田を歩くと、水の中に茶色い錆のようなものがあったり、油のような膜が張っていたりするのに出くわすことがある。私自身、これまでは農薬か化学肥料の影響かと思っていたのだが、どうもそれは鉄バクテリアによるものであるらしい。そして、この鉄バクテリアは、鉄をさびさせるということから、これまではマイナス面でとらえられていたものが、最近は、逆に、水から鉄やマンガンを取り除くはたらきをしている、つまり水の浄化に役立つものとして注目されているようだ。

(8)　何かの病気なのかな？

植物の葉や茎にできる虫こぶは、植物の細胞が増えている時に、昆虫が汁を吸ったり食べたりしてその場所に傷をつけると、昆虫の唾液が植物を刺激し、その細胞が増えすぎたり大きくなったりしてできる。

虫こぶを作る昆虫は、虫こぶを作る植物が一種から数種とほぼ決まっている。例えば、シロダモタマバエはシロダモに、イノコズチウロコタマバエはイノコズチに、というようにである。

それらの昆虫は、虫こぶの中に卵を産むなどして入り込み、その植物に囲まれて成長するのである。その昆虫に寄生する昆虫も存在するなど、自然界の複雑かつ不思議なしくみに目を向けることができる教材の一つとして取り上げた。

季節や植物によっては、虫こぶを割ってみると、その中で生活する昆虫の姿を観察することができる場合もある。残念ながら、今回はそのような場面に出くわすことはなかった。

(9) 謎のメッセージを解読せよ！

植物の葉を見ると、時々、白い筋が入ったようなものを見つけることがある。これはハモグリバエなどの幼虫が、葉の中身を食べながら進んだ跡である。ルーペなどで拡大してみると、そのトンネル状となった跡の中に黒い小さな点が見られる。幼虫の糞である。また、その跡をたどっていくと、先端部に、幼虫や蛹が見られる場合もある。彼らにとって、葉は家であり食料でもある。つまり、家が全て食べ物でできているのである。

そのような、ハモグリバエの食痕の様々な模様を何かの文字として読みとり、何枚かの葉を集めて、言葉とするゲームもおもしろい。例えば、自分のイニシャルを集めるとか、「ＳＯＳ」「ＵＦＯ」などの言葉を作るなどの活動である。

昆虫の生活の不思議さに触れながら、楽しく遊ぶことができるであろう。

(10) 自然の香りを楽しもう！

ネイチャーオリエンテーリングをすると、設問がどうしても知識面に偏ってしまうことが多い。これは、オリエンテーリングの後の答え合わせの時に、得点で競うといったことをするためにそうなりがちなのである。しかし、ネイチャーオリエンテーリング本来の目的を達成するためには、設問は必ずしも正解・不正解がなくても良いと考える。

そこで、特徴を生かした命名を各自でしてみたり、五感を生かした活動を取り入れたりするポイントを数多く設定するとよい。

ここでは、香りのする植物をいくつか紹介した。匂いをかぐという活動は、安全かつ新鮮で、子どもたちにも人気が高い。「このにおいから、その植物に名前をつけてみよう」などという設問を作ると、珍答が続出し、楽しい会となる。

(11) ゲンジボタルの愛の語らいを邪魔しないで！

最近、自然への関心が高まると同時に、ホタル鑑賞の情報がマスコミで取り上げられることも多い。しかし、その場所や時期・出現数がまるで花火大会や花見などと同列に扱われることも多く、鑑賞のマナーについては意外と見落とされがちである。

昨年、私は近くの田んぼにヘイケボタルを見に行ったのだが、遠くに妙な光がフラフラと舞っている？のを見つけた。変なホタルがいるなあ、と思って近づいてみると、なんと携帯電話の照明を点け、それを振り回してホタルをおびき寄せようとしているのであった。その効果のほどは不明だったが。

しかし、ホタルが、成虫としての短い期間において、水から点滅する光を発光させて繁殖活動を行っていることを考えれば、それは望ましい行動ではない。車の照明や懐中電灯をつけることも同様である。

彼らの生活サイクルを正しく知らせることで、どのような観察態度が必要なのかを考えさせることができる。特に、こども自然公園の「ゲンジボタルとその生息地」は、市の指定天然記念物であり、十分な配慮が必要である。

現在、横浜市において、自然発生のホタルが見られるという環境は多くない。そのため、ホタルの成虫の発生時期にこども自然公園で宿泊体験学習を行う学校は、ぜひ、ホタル鑑賞を、ナイトハイクなどに組み合わせるなどして、夜間プログラムに取り入れることをお勧めする。

(12) 二つのカラス

カラスは、スズメと並ぶ身近な野鳥であり、子どもたちが目にする機会も多い。しかし、最近、その増えすぎによる問題がクローズアップされている。増えすぎの原因の一つは、人間の出すゴミがカラスの餌になっていることである。ゴミとカラスの関係は深く、東京都ではカラス対策プロジェクトを組む事態となっている。

ゴミやカラスを通して、身近なまちの環境問題を考えることは、子どもたちにとってとても有意義な学習となるだろう。

ハシブトガラスとハシボソガラスという二種類のカラスを比較することによって、自分たちの住むまちの環境について考えることができる。

また、カラスには一般的に悪いイメージがつきまとうようであるが、学習を深めることで、その行動の多様さを理解し、悪いイメージの払拭に役立つことも考えられる。

(13) 知らなかった！　夜がこんなにくらいとは！

子どもたちが住む住宅地では、最近はなかなか暗闇を体験できる場所が少ない。公園でも街灯の明かりが道を明るく照らし出している。安全管理という観点では当然のことではあるのだが、そのことで夜の怖さや楽しさを実感する場がなくなっているとも言えるのである。

本来、人間が自然の懐に抱かれて生活していた頃は、ある意味で自然に対する畏敬の念を抱きやすい環境にあった。しかし、身の回りに電気製品があふれ、自然と接する機会が減った今、自然の大きさ、偉大さを感じることが少なくなってきた。それと共に、自然を開発し破壊することへの心の痛みも感じなくなってきたのではないだろうか。

夜の深い闇を感じることは、自然のとらえどころのない奥深さを感じるのに絶好の機会である。こども自然公園は、周りは住宅地となっているが、谷戸という地形や豊富な木々のため、一部で周りの光の影響を受けずに闇を体験することができる場所がある。そこで闇を体験することで、普段感じることのなかった世界を知ることができるだろう。

小学校の環境教育では、感性を磨くことが大切だと言われる。闇の中で何を感じるか、それが大切である。

実際の活動では、最初に「きもだめし」との違いをきちんと説明することが大切である。生き物の中には夜に活動するものも多い。なぜ彼らは夜に活動するのか、その彼らの生活の場に、今日は自分たちがお邪魔をさせていただくということを考えながら活動させないと、単にドキドキ体験で終わってしまう。夜の闇を体験すると言っても、怖さのみを必要以上に前面に出すことは避けたい。周りは住宅地であるので安心して活動するよう、子どもたちへの声かけもしておきたい。これらのことによって、子どもたちには暗闇に対する様々な感じ方ができる余裕が生まれてくる。

また、適度な暗さと明るさの確保のため、ここではアルミ缶を利用したカンテラの使用を紹介した。懐中電灯などの安定した明るさではない不安定な明るさが、現代文明との違いを考えるきっかけにもなる。

子どもたちが、この活動を通して何を感じたかが、このプログラムの成否を分けることになると思う。

(14)　自分が育てた野菜でカレーを作ろう！

前回の研修会では、野島の海の幸を生かした食事プログラムを提案した。しかし、ここ大池では、残念ながら特に特産というべき地元の食材がない。そういう場合は、やはり子どもたちに人気があり調理しやすい定番の「カレー」の登場となる。

今回は、カレーの食材を学校で作って持っていこうという提案である。自ら育てた野菜で食べるカレーの味はまた格別である。命と食とを見直すきっかけにもなる。

宿泊体験学習のプログラムは、ややもすると、その場限りのものに終わりがちである。しかし、このプログラムは、子どもたちが目的意識を持って野菜の栽培に取り組むため、意欲が持続しやすく、宿泊体験学習が単発のイベントになりにくく、総合的な学習の時間への発展も可能となる。

(15)　近自然工法を学校ビオトープに取り入れてみよう！

本研修会で行った時、ちょうど公園の一部改修工事が行われていた。本当はその場所をメインに実習を行おうと考えていたのだが、よく見ると、普段あまり見ることのできない、整備前の様子を見られることに気付いた。

最近、ビオトープを整備する学校が増えてきているが、その際の参考にとも思い、近自然工法の様子を観察することにした。

この場所は、以前は昔ながらの谷戸田の雰囲気を色濃く残していた。今回、観察したのは、谷戸田の脇の水路である。

水路に小石を敷き詰め、その水路の岸の崩壊防止のために木の杭を打ち、細い木の枝を集めたものやシュロの皮をまとめたものを護岸に用いていた。そのような自然物を使うことで自然回復が早まり、多空間スペースには多くの生物が住めるようになるはずである。

(16)　雑木林のいろいろなお話

雑木林を見ると、一本の木が何本にも株立ちしていることに気付く。木の根元がこのように株立ちしているのは、その昔、炭焼きが行われ、切られた樹木が萌芽新生をしていたことを示している。このあたりの谷戸田では、昔、雑木林の管理をしながらその恩恵を受けるという生活が営まれていた。

昔話の「桃太郎」では、「おじいさんは山に『しばかり』に、おばあさんは川へ洗濯に」という表現が見られるが、その『しばかり』は『芝刈り』ではなく『柴刈り』なのである。柴とは森や林の林床に生える下草のことである。川に小枝や笹を結んだものを沈めて、そこに入った魚やエビなどを捕ることを『柴づけ漁』というが、これもそこから来た言葉であろう。谷戸の自然と共に生きていた昔の人の生

活を現在の生活と比べる良い機会ともなる。

また、最近の雑木林を見ると、シュロがあちらこちらで伸びているのに気付かされる。シュロは、本来九州南部に分布する暖地を好む樹木である。しかし、地球温暖化の影響で、生息地を広げているようなのである。野鳥による種子散布と地球温暖化という面から考えると興味深い。

⑰　土の生い立ちを探ろう！

地上に落ちた葉は、分解されて土に変わっていく。その様子を実際に観察してみようというのが、このプログラムの趣旨である。

徐々に土の表面から真下に向かって掘り進めるという方法もあるが、今回は、その変化をよりわかりやすくとらえるために、斜めに掘っていくことにした。つまり、土の表面を削ぐようなつもりで横方向に徐々に深く掘っていくのである。そうすることで、葉が土に分解されていく様子を年表のようにわかりやすくとらえることができる。

このプログラムを実施してみたところ、葉を分解している菌類や小昆虫類の存在がとてもよくわかった。一般に落葉樹の葉の方が常緑樹の葉よりも分解されやすいと言われているが、今回の観察ではその違いは明らかでなかった。

このプラグラムを通して、葉が単に葉であるだけでなく、土に還るものであること、生物の食べ物であり、地面の湿度を保つものであることなど、葉の様々な役割に気づき、生態系全体へと目を広げることができるであろう。

⑱　森の掃除屋さん、素顔を見せて……。

このプログラムは、⑰と共に、生物の消費・分解という観点から生態系全体へと目を向けさせるプログラムである。これは、夜間プログラムでも使える上、自分の学校の環境との違いを明らかにする上でも効果的であるので、お勧めのものである。

地上徘徊性の昆虫の正しい調査をするには、ベイトトラップを一カ所につき10個程度かけ、１～２日後に回収するのがよい。

今回の研修会は、昼間の開催であり、トラップをかける時間が５時間程度と短かったこと、５月という時期、肉を腐らせておけなかったことなどから、昆虫の捕獲数に不安があった。しかし、実施したところ、一つのトラップだけで、十数匹のオオヒラタシデムシを中心にアオオサムシも数匹かかり、このプログラムが前述のような条件であっても十分可能であることが判明した。

⑲　明るい森と暗い森、どっちが好き？

これは、広葉樹と針葉樹が生えている場所の様子の違いを観察することで、生物の多様性について考えさせるプログラムである。

視点としては、林床の植物の様子、枝の付き方、明るさ、葉の表面の様子、葉の厚さ、見上げたときの空間の様子などがある。

これらの点から見ると、広葉樹と針葉樹（自然林と人工林という比較が多くなる）が、それぞれに特徴のある森を形成していることがわかる。表にして見比べるとその違いがわかりやすいであろう。

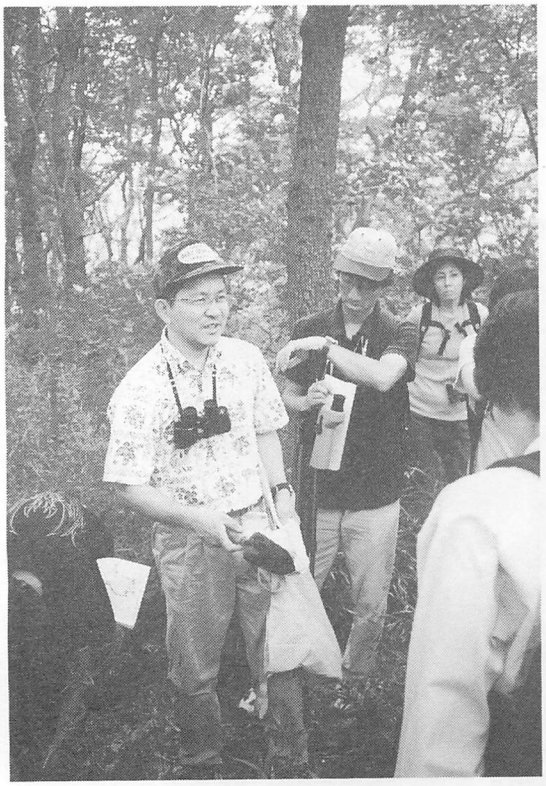
5．研修会を終えて

今回は、宿泊体験学習の野外プログラム、特に横浜の原風景である「谷戸田」を生かしたネイチャーオリエンテーリングにも利用できる自然環境について研修を行った。

特に今回は、私と同じ横浜市立小学校の教員である三枝秀明氏に多大なるご指導をいただいた。氏は、自然観察指導員であり、ペットボトルを生かした理科教材の開発や、コンクリートパレットを使用したメダカ池づくりなど、自然の少ない地域でも子どもたちが自然を身近に感じることができるような様々な実践を行っている。

また、本会は野鳥を通して環境を考えるというスタンスだが、氏は、当日も、地形や環境などの広い観点から、それを構成する生物を見つめるという考え方や自然の見方についてご指導くださった。自然に対する豊富な知識と、数多い実践に基づいた環境教育についてのお話は、参加者にとって大いに参考になったことと思う。

この場を借りて深く御礼を申し上げる次第である。



今回は、15名程度と参加者数は少な目だったので、運営はしやすかった。アンケートによる集約を行わなかったが、個人的に寄せられたメールの中から、その一部を抜粋する。

・研修会楽しかったです。ありがとうございました。私の勤務する小学校では昨年から全校遠足で大池へ行っています。が、大池の自然環境を生かした活動を計画することができませんでした。それは計画する側の我々がせっかくの環境に目が向けられていないからだと、つくづく思いました。
今回の研修会での一番の喜びは、カワセミを写真ではなく、剥製でもなく、この目でしっかりと見ることができたことです。修学旅行の準備でいそがしかったから参加するのを迷いましたが、参加してよかった！！　また来年を楽しみにしています。

・土曜日はどうもありがとうございました。あのくらいの人数だとその場で聞きたいことを聞くことができたり、何気ない会話の中からおもしろいお話が聞けたりして楽しかったです。
普段は自分の目線でしかものを観ていないけど、果てしなく小さいミクロの宇宙から、果てしなく大きい宇宙まで広がっているんですね。
数年後には、恨みもないのに理不尽に嫌っている虫たちを同じ地球の親しい仲間と感じるようになりたいです。

本研修会では、自然観察会的なプログラムが多かったが、参加者の声にもあったように、実物を自分の目で見ることがいかに大切であるかを、また、教師の体験が豊富であれば授業の内容もより豊かになっていくであろうことを改めて感じた。

平成14年度から新学習指導要領が実施され、教科書の内容も大きく変わるが、取り上げられる生物も大きく変わるようである。そこで、来年度は、特に環境教育に関わりの深い「理科・国語・音楽」の三教科の教科書に取り上げられた生物の観察会を行いたいと考えている。どんな研修会になるか、企画する側としても楽しみである。

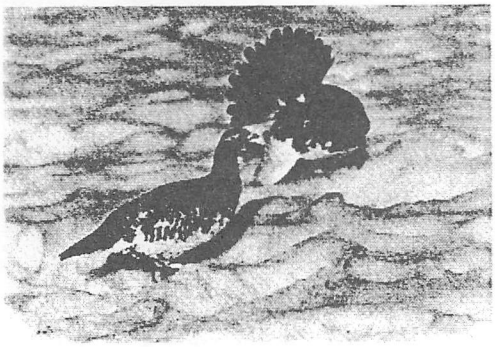
「とやまバードウォッチング」

理事　林　梅夫

※　本会の理事をつとめていただいている林梅夫氏による「とやまバードウォッチング」のシリーズが、月刊誌『富山県人』〔㈱富山県人社発行〕の７～12月号に掲載されました。著者ならびに出版社の許可を得て、転載させていただくことにしました。　（事務局）

とやまバードウォッチング①

ライチョウの求愛行動



（みくりが池付近、６月下旬）

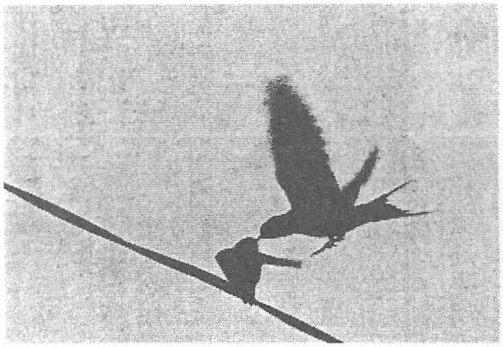
ライチョウは国の特別天然記念物に指定され（昭和30年）、絶滅危惧種にもなっている。立山一帯には約1400羽、室堂周辺には334羽が生息するという（平成８年調査）。

雪の下からハイマツが顔を出す頃、雄はなわばりを作って雌が来るのを待つ。写真のような求愛行動でペアが形成され、雌はハイマツの下に産卵する。７月頃には天敵のイヌワシやキツネから身を守りながら雛を連れて歩き、ハイマツの葉やチングルマの花を食べる様子を見たことがある人も多いだろう。

県鳥、富山県の宝として県民の関心も高い。ライチョウが生息できる環境を守っていきたいものだ。（ビオトープアドバイザー・林　梅夫）

とやまバードウォッチング②

ツバメの空中給餌



（砺波市杉木にて）

ツバメが南の国から富山にやってくるのは、例年３月28日頃。ネコや蛇など天敵の来ない高いところに、しかも老人や子供のいる家に好んで巣を作るようだ。古巣を改修したり、新しく作ったり。

８月には２回目の子育てに入る。電線にとまる子ツバメに親ツバメが〝空中給餌〟という珍しい光景をとらえた写真を大切にしている。

富山県のツバメ調査は昭和46、47年頃、全国に先駆けて始まった。５月10日前後の愛鳥週間に小学生が地区の家々を回る。30年前は５万羽、昨年は２万8000羽余り。戸締まりが厳重になるなど、迎える環境が変わってきたことも減少の一因だろうが、気がかりだ。　（ビオトープアドバイザー・林　梅夫）

とやまバードウォッチング③

十二町潟のオオヨシキリ

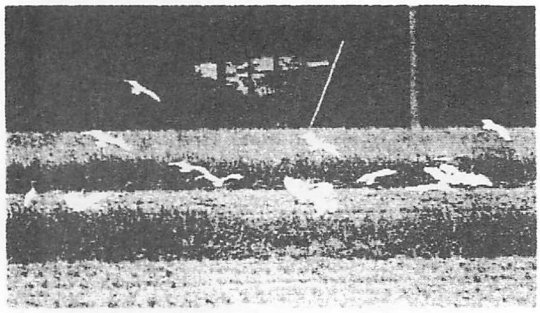
かつて砺波野でも田植えの頃、オオヨシキリが「ギョギョシ、ギョギョシ」と鳴いた。俳人が「行々子」と表記して作句に使う鳥だ。

近年、砺波野でこの鳴き声がまったく聞かれなくなったのは、基盤整備、河川改修が進んだからだろうか。写真は氷見の十二町潟に出かけて撮影したが、ヨシ(葦)の先端で茎を切るかのように止まる特徴的な止まり方がわかるだろうか。名前はこの止まり方から付けられたようだ。ヨシやマコモが密生した水辺に生息し、オリーブ褐色で、スズメより少し大きい。南方からやってくる夏鳥。

日本の美称「豊葦原」の象徴となる大事な鳥だと思う。　　(ビオトープアドバイザー・林　梅夫)

とやまバードウォッチング④

共存共栄、群なすアマサギ



20羽、30羽と群で行動することが多い。刈り取りを終えた田に降り、前進しながら最後尾の鳥が群を越えて最前列に出て昆虫を追い出す。これを繰り返して全員が平等に餌を採る。一名ショウジョウサギ。

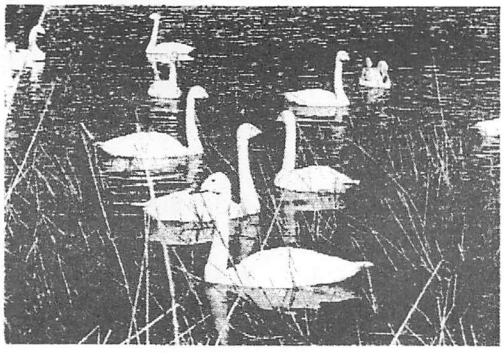
繁殖期になると頭部は狐色、胸部や背は美しい緋色となる。この色合いが飴の色に似るところからアメサギ、アマサギと和名がついたという。

夏鳥として日本に渡来(一部留鳥)、コサギに似るが、くちばしがコサギは黒く、アマサギは黄色である。年々日本列島を北上して生活圏を拡げている。富山県には昭和30年後半頃から姿を見せ、今では普通に見られる。砺波市杉木地内で。

(ビオトープアドバイザー・林梅夫)

とやまバードウォッチング ⑤

冬の使者・ハクチョウ



（田尻池のオオハクチョウ）

30数年前、富山県へのハクチョウの飛来数は10数羽だった。近年は12月の声を聞くころから３月頃まで、100羽前後が冬の使者として訪れる。

飛来地は、富山市の田尻池がよく知られている。氷見市十二町潟、庄川、神通川でも、たまに姿を見る。県人の野鳥に対する愛情がハクチョウを呼ぶのだろう。

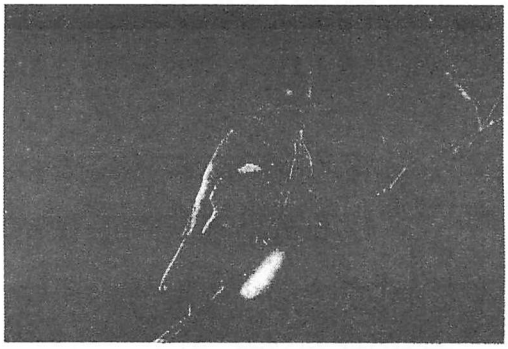
シベリア東部で繁殖し、湖沼、湿田に家族群で生息する。餌は水生植物の根、貝類で水生小動物も含まれる。家族群が集まって数千羽の大群となることもある。富山県に飛来するのはオオハクチョウで、コハクチョウも混じるもののごく少ない。

（ビオトープアドバイザー・林　梅夫）

とやまバードウォッチング ⑥

あられの降るころ訪れる

ジョウビタキ



雌のジョウビタキ

スズメくらいの大きさで頭が銀灰色、顔が黒色、胸、腹、腰は赤褐色。尾を振っては頭を下げる。翼に白い紋があるためモンツキドリともいい、よく目立つ美しい鳥・ジョウビタキは、10月下旬ごろから４月半ばまで見かける冬鳥だ。

祖母が「ヒタキが来ているぞ。火の用心せんにゃ」と言いながら、火箸で囲炉裏の火を寄せていた様子が思い出される。

両足飛びだが敏捷に動き、火打ち石をたたくようなクワックワッと高い声で啼く。“ヒタキ”と呼ばれる所以であり、ホトケノユウタキ、ホトケノコウタキなど俗名も多い。

（ビオトープアドバイザー・林　梅夫）

バードカービングを鳥の保護に活用する

日本バードカービング協会会長　内　山　春　雄

本誌No.63で、バードカービングが狩猟のときに用いる囮、デコイから生まれてきた物であると書きました。

デコイは、ハンターが何年もの試行錯誤の結果あみだした狩猟の道具であり、実に理にかなった狩猟方法です。

アメリカのデコイミュージアムを３ヶ所訪れましたが、同じオナガガモでも、作られた場所により、異なった材質が使われていることに気づきました。水草が多く生えた沼なのかどうかといった生息環境により、デコイの構造も違ったりしていて、先人達の深い知恵には感心させられました。

日本ではデコイと言えば「木をカモの形に彫って、簡単な彩色をした物」と思われていますが、移動性、経済性、耐久性があり、なおかつ誘引効果が高いものが追求されてきたのです。

ここで特に注目したいのが、鳥に対しての誘引効果です。どの鳥もデコイに引き寄せられるというわけではなく、群れで行動する鳥の場合に効果があるようです。モズやジョウビタキのように単独で暮す鳥も、デコイを置くと近寄っては来ますが、これは自分のなわばりから追い出そうとやって来るわけで、やがて激しい鳴き声と攻撃が始まってしまいます。

ガン・カモの仲間のデコイはよく見られますが、実はシギ・チドリのデコイもあり、エトピリカやウミスズメの猟もデコイによって行われてきました。変わったところでは、マガモやハトを引き寄せるための道具として、トウモロコシのデコイもあり、博物館で説明を聞き、はじめて納得しました。

これらの猟師が長年つちかってきた知恵を、鳥の保護に使えないだろうかと考えたのが、アホウドリのコロニー移転計画です。

1990年１月に「アホウドリの保護にデコイが使えるかもしれない」という話を聞き、是非自分の手でアホウドリのデコイを作りたいと思い、一度も見たことのない鳥のカービングとの格闘となりました。

狩猟に使うデコイは射程距離まで鳥をおびき寄せればその使命を果たしたと言えますが、保護に使うデコイの場合は違っていました。引き寄せるだけでなく、仲間だと認識し、その場で鳥同士が出会い、ペアーを組み、抱卵、巣立ち、という所まで進まなければ成功とは言えないのです。

そこで、今回のデコイは写実的に彫り、彩色も実物に近いものにしました。

できるだけ多くの実験を行うためには、色々なポーズが必要で、首から上を２種類彫り、胴体と足も差し込み式にしました。デコイを首、胴、足と三つのパーツに分けた事で、大きな鳥でも彫りやすくなり、デコイのポーズに変化を持たせることが出来ました。

標準形Ａ、ディスプレイ形Ｂ、足を取った抱卵形Ｃが出来上がりました。これに成鳥と幼鳥を塗りわけ、それぞれ異なったペアーを組ませる事で、コロニー全体に変化を持たせることが可能になり、自然なデコイのコロニーが私の頭の中に出来上がりました。

木型が出来てからも、型取り、型ぬき、彩色の作業が必要です。デコイが出来るまでの資金を工面し、ようやくデコイは鳥島へ行き、いよいよアホウドリの反応を見ることとなりました。

まるで私が作ったデコイをアホウドリに審査されているようで、報告が来るまでは気が気でありませんでした。幸い、心やさしい１羽がデコイに近づいて羽づくろいしてから、居眠りをはじめたそうです。これはデコイに興味を示したことと、デコイを仲間と思ってくれたからだろうと思います。

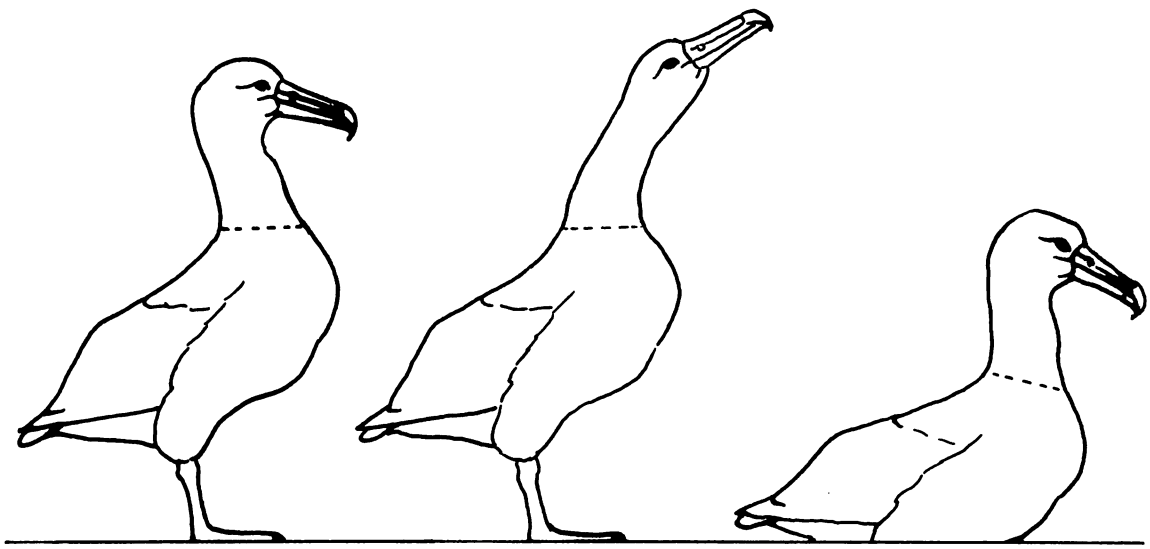
そして今では、100体ものデコイがコロニーの雰囲気を作り、アホウドリたちを招き寄せています。ここまで来られたのは、多くの人の理解と努力のお陰であり、その上でようやく実現できた保護活動であると言えるでしょう。

新しいコロニーから巣立った幼鳥が鳥島に帰りはじめているので、このコロニーでペアーを組む事が出来れば、毎年２羽ずつ増えていくのも夢ではないでしょう。できれば複数のペアーが複数の卵を抱き、複数の雛が巣立って欲しいものです。

デコイを使っての鳥の保護も未知の部分が多く、毎年同じ場所に同じようにデコイを置くと、アホウドリは興味を示さなくなるのか、飛来数が減るようです。あらゆる可能性を、手探りで見つけ出すしかないようです。ここでの経験はこれからの保護活動に必ず役立つことでしょう。

鳥島での活動が理解され、1998年から山口県熊毛町でもデコイを使ったナベヅルの誘引実験が始まりましたが、まだわからないことがあまりにも多く、難航しているようです。

保護活動というのは、多くの人々が関わって苦労するわりには、実りの少ない地味なものですが、現場で活動している人のために、使い勝手の良いデコイをこれからも作っていきたいと思っています。



標準形Ａ、　ディスプレイ形Ｂ、　足を取った抱卵形Ｃ

もりまき通信(15)

テレビでバードウォッチング

自然観察指導員　　森　真希

●一生の間に何本見ることに…

私たちは、生まれた時からほとんどの家庭にテレビがあった世代である。私たちの両親は、カラーテレビに感動した世代と聞いた。私たちの子供たちは、壁掛け液晶テレビにＤＶＤレコーダーが家庭に普及している世代になるのかもしれない。

最近は、ケーブルテレビや衛星放送などの普及もあり、テレビ局や番組の数も大幅に増えて、私たちの選択肢もそれなりに増えてきている。そのようななか、私たちは一生の間に果たして何本の番組を見ることになるのだろうか。平均寿命70～80才強という時間のなかで、一体どれほどの時間をテレビ画面に向かうことに費やすことになるのだろうか、また費やしているのだろうか。

もっとも、これは一生の間に米を何粒食べるかを論ずるのと同じようなものかもしれない。とりあえず「テレビ文化論」は他に譲ることにしよう。

●番組メモの習慣

せっかく、電気代と人生の時間を費やして番組を見るのだから、見っぱなしではもったいない。そう思って、番組を選んでメモをとるようになったのが、私が高校生の時。当時は、「地球ファミリー」や「わくわく動物ランド」などが放送されていた。

昔の雑多ノートを引っぱり出してみたら、10年前に放送された番組のメモが出てきた。インドガビアルやグアナコといった海外の野生動物の名前や生態が走り書きされている。野鳥では、フラミンゴを襲うサンショクウミワシ、嘴の長さが上下で違うハサミアジサシ、自分の体で傘をつくり日陰に魚を誘き寄せるクロコサギなど。これらはテレビの映像で覚えた鳥たちである。改めて読み返すうちに、初めてその生き物の存在について知った感動が蘇ってきた。

この番組内容をメモするという習慣は、なぜか今でも続いている。ただ、以前はメモをとる先をきちんと決めていなかったので、ルーズリーフや大学ノート、広告の裏などバラバラであり、整理や保管に困っていた。それで、どうしようかとさんざん迷ったあげくに、バイブルサイズのシステム手帳に統一することにしたのが５～６年前のことである。そして、番組名ごとに分類し、テーマをあいうえお順にして検索もできるようにまとめることにした。

こんなことをするなんて時間の無駄遣いかなと思うこともあったのだが、自分自身で納得のいく心境にさせてくれた、ある文章と出会った。

●私だけではなかった！

日本で唯一の鳥の専門雑誌「BIRDER　バーダー」。この月刊誌のバックナンバーを何冊か読んでいたところ、目にとまったページがあった。1995年11月号75頁に掲載されていた桐原政志さん御執筆の「キリちゃんの徒然鳥(41)～テレビバードウォッチングのすすめ～」である。その一文には「…小学校から中学生にかけて、さまざまな場所の生物を扱ったテレビ番組を見ることが好きだった。しかも、出現した生物の名前や体の特徴、さらには何を食べていたかというようなことまで必ず手帳につけていた。まさにテレビを通してバードウォッチングをしていたのである。」とあった。タイトル通り、自然系番組をもっと利用しようという内容に、強い共感を覚えた。

室内にいながらにして、世界各地に生息する野生生物の映像を見ることができる。それは、まるで画像を通して生態百科を眺めているかのようである。今では映像も美しくなり、取材される方の御苦労もあって、世界初の映像や、最新の研究成果なども紹介されることもある。生き物名のテロップも、生き物好きにとっては有り難いことである。

このように、テレビはブラウン管を通して、バードウォッチングのみならず、国内外の野生生物を楽しむことができる道具なのだ。

●いろいろな自然・生き物系番組

今現在では、地上波だけでも「地球！ふしぎ大自然」「素敵な宇宙船地球号」「さわやか自然百景」「動物奇想天外」などが放送されている。これに加えて、我が家では、すでに放送終了になった「生き

もの地球紀行」や「神々の詩」「たけしの万物創世紀」などを録画した「見ていない」ビデオテープが山積みになっている。育児で思うように野外に出ることができないこの頃は、娘と一緒に何年か前の「生きもの地球紀行」などを見ながらメモをとり、1本1本片付けているところである。娘も楽しそうに鑑賞しているようなので、いい気になって番組メモに付き合わせる今日この頃である。

ただし、ごくごく稀に間違った解説やテロップが入ることもあるので、番組内容の引用にはそれなりの裏付けがあったほうが安心かもしれない。

●やはり復習しないと忘れがち

メモをとって、見っぱなしでは終わらせない、というのは良しとして、私は困った問題を二つほど抱えている。一つは、ブラインドタッチならぬブラインドライトができないので、書くことに熱心になると、肝心の画面を落ち着いて見られないこと。もう一つは、メモをとることで安心してしまうせいか、頭の中になかなか番組の内容が残ってくれないことである。

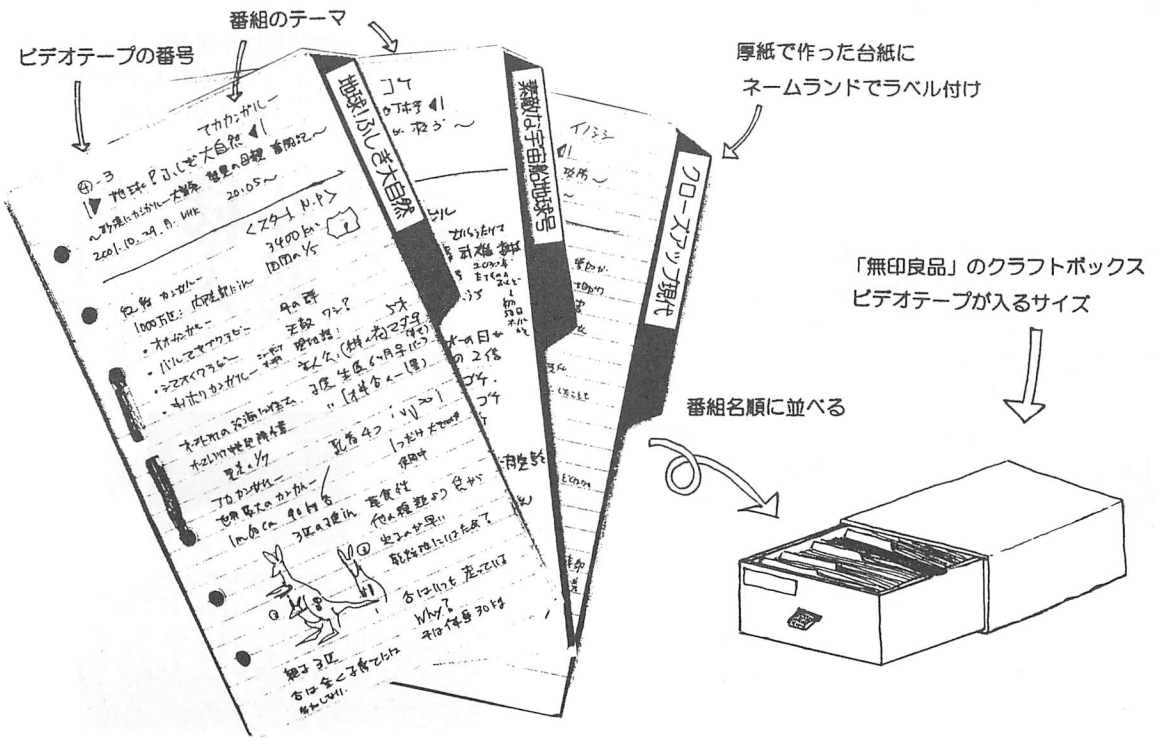
時間にゆとりさえあれば、ゆっくり気に入った放送を見直したり、紹介された動植物を改めて図鑑などで調べ直したいところであるが、実際にそのような機会が得られることは少ない。それでも、メモをとること自体が自分自身の勉強になることだし、メモ書きが手元にあれば、また何かしらの折に見返したり、学んだことを他のものへ還元したりといったことができるかもしれないと、前向きに考えることにしている。

●いつか本物に…

今回は、これからも使っていくことになるであろうテレビ番組の視聴時間とその方法について考えてみたのだが、みなさんは、テレビとどんなおつき合いをされているだろうか。

最終的には、いくら素晴らしい映像を視聴できても、やはり本物にかなうものはない。様々な生き物たちの映像を見ながら、娘と一緒に「いつか行ってみたいな、いつか会ってみたいな」と思いを寄せる場所が次々と増えていくのである。

もりまき流「番組メモノート整理法」



書籍紹介

『移入・外来・侵入種 ―生物多様性を脅かすもの』

川道美枝子、岩槻邦男、堂本暁子編，2001年12月，
築地書館（株），定価（本体）2,800円

事務局　箕　輪　多津男

移入種あるいは外来種の問題については、『愛鳥教育』誌上においても、これまでに何度か議論がなされて来たところであるが、現在の地球上における自然保護活動およびそれに関連する環境教育活動においても、最も重要かつ危急性の高いテーマの一つであると言ってよいであろう。

本書はこうした問題について、大変幅広い視点から真正面に論じており、大変読み応えのある内容となっている。

まずその執筆陣の多彩な顔触れが目に留まるが、それぞれの専門分野における現状の分析と問題点の指摘がなされている。論述されている生物種は、鳥類、哺乳類、両性類、爬虫類、魚類、昆虫類、貝類、そして様々な植物種や、果ては病原菌等の微生物にまで至っており、問題の深刻さと根深さを物語っている。また、各地域で発生している具体的なケースが逐一紹介されているので、読者にとってはより鮮明な形で問題の実像を把握することができるようになっている。

また、固有な生物種と生態系を有する希少価値の高い自然環境の問題を数多く取り上げる一方、私たちにとってごく身近な自然環境に忍び寄っている脅威の実態も披露しているので、海外での実情も含めて、移入種や外来種の問題が人類共通の問題であることが改めて認識させられる。

なお、巻末には重要な用語の解説や、2000年にＩＵＣＮ／ＩＳＳＧ（世界自然保護連合・侵入種専門家グループ）が選んだ「世界の外来侵入種ワースト100」のリスト等が掲載されていて、こちらも参考になる。

全体を通じて深刻な問題を論じているにもかかわらず、それぞれの文章は大変読みやすく、初心者にも分かるように工夫されていることがうかがえる。本文中に挿入されているいくつかの「コラム」も、興味深い内容となっている。

本書の副題にもある通り、生物多様性を脅かすものとして、移入種や外来種の問題は今最も注目されている問題の一つである。にもかかわらず、この問題は解決の糸口が見いだされるどころか、むしろ年を追うごとにその深刻さは増し、被害の拡大が進んでいる。しかも、それは全世界的に同時進行してしまっている。

しかし、移入種や外来種の問題はすべて人為的なものであり、その責任の重大性は計り知れないものであることに違いはない。そのことをしっかりと自覚した上で、生物の一員としての人類のあり方を、今一度問い直していくことが私たち一人一人に求められていると言える。

本当の意味で、生物多様性を保全するとはどういうことなのか。本書によって多くの人々が改めて考える機会を得ることができるものと考える。

『谷津干潟を楽しむ　干潟の鳥ウォッチング』

石川　勉　著，2001年8月，㈱文一総合出版，定価（本体）1,600円

事務局　箕　輪　多津男

本書は、谷津干潟を27年間もの長きにわたり観察し続けてきた著者による豊富な写真や鳥類の個体数に関するデータ等がふんだんに盛り込まれた、大変貴重な記録集である。同時に、東京湾岸に残る数少ない干潟の一つであり、ラムサール条約の登録地かつ国設鳥獣保護区にも指定されている谷津干潟の詳細なガイドブックにもなっている。

本文の構成は、主に「干潟を訪れる鳥たち」「四季の干潟」「威嚇行動と採食行動」「シギ・チドリの渡り」の４章からなる。

「干潟を訪れる鳥たち」では、珍鳥も含め、谷津干潟においてこれまでに記録された鳥類が一種ごとに解説されていて、さながら「谷津干潟鳥類図鑑」の様相を呈している。なお、章末には底生動物と魚類についても紹介がなされている。

「四季の干潟」では、文字通り、季節ごとの干潟の様子が、鳥相の変化を中心とに紹介されている。サギ類やカモメ類の季節変化や、カモ類の経年変化に関するデータ、あるいはシギ・チドリ類と猛禽類との攻防に関する記述は、大変興味深いものである。

「威嚇行動と採食行動」は、干潟を訪れる鳥たちの餌を巡る生態を、連続写真等を用いながら解説したもので、彼らの生存にかける日々の行動が生き生きと描きだされている。

「シギ・チドリの渡り」の章では、北はシベリア（ロシア）やアラスカ（アメリカ）から南はオーストラリアやニュージーランドに至るまでの渡りのルートを中心に、そのメカニズムやリング（脚環）あるいはフラッグ（プラスチック製の小旗）を使用した鳥類の渡りの調査方法等について、分かりやすく解説されている。

一方、その中にある「傷ついた鳥」という項においては、釣り針やテグスをはじめ何らかの要因によって大きな痛手を負った鳥たちの姿が掲載されていて、鳥類と人間との共存に向けて、改めて我々の行動が問われていることを認識させられる。そして巻末には、「シギ・チドリ類の渡来数比較」のデータや「谷津干潟周辺の鳥類」の目録等が掲載されているが、長年の観察の重要さがここでも光を放っている。

谷津干潟においては、本会もこれまで何回か自然観察会や研修会を開催してきたが、次の機会には、是非本書を携えて臨みたいと考えている。読者の皆様にも、是非お薦めしたい一冊である。

なお、著者の本職は料理人であり、日本橋浜町にて中華料理店を営んでいらっしゃる。もちろん料理の味も絶品である。その店の常連でもあり、また著者の親友でもあるＡＬＦＥＥ（アルフィー）の坂崎幸之助氏による推薦文が本書の帯を飾っている。

書籍紹介

『歌集　白鳥聖歌』

村本義雄　写真・短歌集　白鳥聖歌，2001年12月20日，
頒布価格3500円（税込）（本体：3333円）
総頁数：136頁　サイズ：B5版

常務理事　島　田　利　子

白鳥たちの声が聞こえてくるような美しい写真の表紙を開けると、これまた美しいカラー写真が次々に続きます。優雅な白鳥の舞う姿からはじまり、のどかに餌をついばむ群れ、そして人とのふれあいなど、すばらしい「映像」を見る事ができます。厳しい自然界の中でひたすら生き抜く白鳥たちと、彼らにひたすらに愛情を注ぐ人間との、心あたたかい交流の様子が見事に写し出されています。

しかし、人間のために悲惨な目にあった野鳥たちの姿もあります。心あらぬ人のために痛ましい姿になった鳥たちの写真は、私たちの心を複雑な思いに駆り立てます。村本さんの痛恨の想いがストレートに伝わってきます。

歌集「白鳥聖歌」は、一見、写真集かと見間違えるほどですが、タイトルの通り「歌集」です。一枚一枚の写真が、深く感動的に受け止められるのも、91枚の写真のそれぞれに詠まれた短歌によるのだと改めて気がつきました。写真の撮影の技術はもとより、写真を撮られたその時の心境が見事に詠まれています。そして、その短歌が、写真の映像の意味を深く理解させてくれるだけでなく、より強烈に印象づけて記憶に残してくれるのです。村本さんの鋭い観察の目、やさしき白鳥への想い、子どもたちへのやさしい眼差し、その一首一首に深い感動を覚えました。

また、後半には、短歌155首が掲載されていますが、村本さんが、常に情熱をもって活動していらっしゃるご様子が伝わってきます。

昨年（2001年）12月12日に東京日比谷の松本楼で開催された愛鳥懇話会の折、村本さんにお会いし、直接、歌集のことをお聞きする機会に恵まれました。できあがる寸前の本を手に、詳しく私にお話くださいました。とても熱心で、その迫力に圧倒される思いがしました。この熱意こそ、長い間、村本さんが自然保護を続けてこられたその原動力なのだと思いました。

私も、探鳥会の折、参加者と共に俳句をつくることを実践しています。また、子どもたちにも季節を感じとれるようになってほしいとの願いから俳句をつくる授業も実践しています。これからも、続けていくつもりでいますが、村本さんのように、一句一句を大切にして残していきたいと思いました。

歌集「白鳥聖歌」にこめられた、村本さんの白鳥の保護への想い、そして、自然に対するやさしさが読者の心に強く印象づけられることでしょう。

■購入方法について（案内チラシより転載）
※本書は書店では販売しておりません。
購読ご希望の方は、購読料3500円（税込）と送料を添えて、下記あてお申し込み下さい。
注文票は郵送またはFAXでお送りください。
この本の売り上げはトキ保護活動の資金にあてさせていただきます。

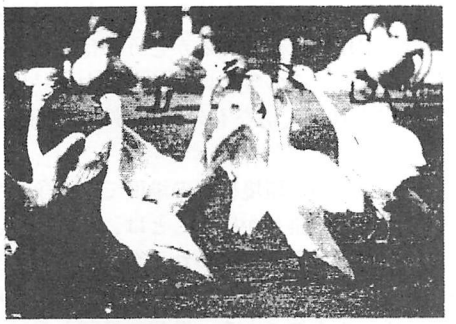
●お申し込み・お問い合わせ
村本義雄
〒925-0001　石川県羽咋市上中山町レー8
TEL. 0767-24-1223　FAX. 0767-24-1351
購読料・送料のお振り込みは
郵便口座：00780-8-33428（名義：村本義雄）

好評発売中!!

村本義雄
写真・短歌集

白鳥聖歌

SWAN SACRED SONG



歌集 白鳥聖歌

写真・短歌　村本義雄

生まれ故郷にほど近い邑知潟で、十数年にわたり白鳥の保護に尽くしてきた村本義雄氏。その尽力の甲斐あって、今や邑知潟は白鳥の越冬地として全国にその名を知られています。そんな村本氏が白鳥の聖域・邑知潟を詠んだ、待望の写真・短歌集ができました。邑知潟で白鳥と喜怒哀楽を分かち合う日々を詠み込んだ246首の短歌と、91葉の写真からあふれでる、白鳥への愛情―。ページをめくるたび、熱い思いが感動となって伝わってくる一冊です。

※本書は書店では販売しておりません。
購読ご希望の方は、購読料3500円(税込)と送料を添えて、下記あてお申し込みください。
注文票は郵送またはFAXでお送りください。
この本の売り上げはトキ保護活動の資金にあてさせていただきます。

●お申し込み・お問い合わせ

村本義雄　〒925-0001 石川県羽咋市上中山町レ―8
TEL:0767-24-1223 FAX:0767-24-1351

購読料・送料のお振り込みは　郵便口座:00780-8-33428(名義:村本義雄)

領布価格 3500円(税込)
(本体:3333円)

■総頁数:136頁　■サイズ:B5判

写真・短歌／村本義雄

キリトリ線

注文票	お名前	連絡先 TEL.　(　　)	
	住　所	冊　数　冊	注文日　月　日

白鳥聖歌
●お申し込み・お問い合わせ
村本義雄 〒925-0001 石川県羽咋市上中山町レ―8
TEL:0767-24-1223 FAX:0767-24-1351
購読料・送料のお振り込みは
郵便口座:00780-8-33428(名義:村本義雄)

テロや戦争という名の野生生物への脅威

事務局　箕　輪　多津男

昨年は2001年、つまり記念すべき21世紀最初の年であったが、世界の情勢は、人々の願いとは程遠いものであったと言えよう。

９月にニューヨークで起こったテロをきっかけに、その報復と称してアメリカ軍を中心に行われたアフガニスタンへの連日に渡る空爆と、それにつながる各地での地上戦は、予想以上に長期化する結果となった。こうした状況にパレスチナ問題や宗教問題が絡みつつ、次々と世界各国を混乱の渦へと巻き込んでいる。そして、アフガニスタンは新たな政治体制のもとに国づくりをスタートすることになったものの、そこに解決すべき問題はまだまだ山積しており、一方、テロに関する解決の糸口については、今のところ全く見いだされていないというのが現実である。また、アフリカやアジア、中南米等、現在でも紛争が続いている地域も少なくなく、その大半は泥沼化している。

テロや戦争により、多くの殺戮が行われ、土地や建物が根こそぎ破壊されていく。しかし、失われるものはそれだけではない。戦場に生息している多くの野生生物がその度に犠牲になっていくのである。

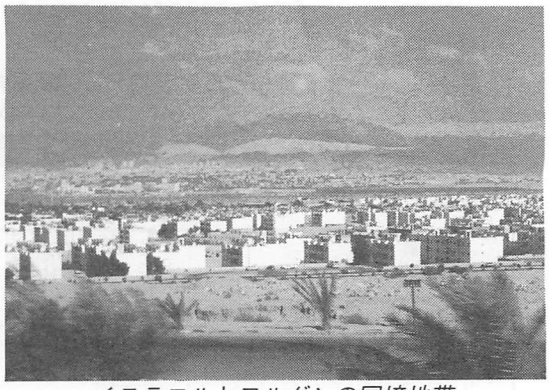
内戦の跡地や地雷の爆破地等を見てみると、干からびた昆虫や小動物などの死体が数多く飛び散っている様子を目のあたりにすることがある。彼らは、一瞬の爆撃に逃げる間もなく命を散らせるしかなかったのである。木々は枯れ、草原は焦土と化してしまう。こうして、これまでに気の遠くなるような、それこそ無数と呼べる生物が犠牲になってきたわけである。

自然保護、あるいは生物多様性の保全等の推進に向け、多くの取り組みが世界各地で進められているものの、本当の意味でそれが実現するためには、テロや戦争（紛争）を、まずはこの世界から無くしていくことが重要となるのではないだろうか。野生生物の未来にとっても、世界の、いや人間世界の平和の実現が大変大きな鍵を握っていることは間違いないであろう。

ただし、これは人類の永遠のテーマとも言えるべきもので、実現の日が訪れるかどうかは知る由もない。だからこそ、その実現に向けた努力を続けていくことが何よりも大切なものとなるはずである。

愛鳥教育あるいは環境教育の場面で、戦争と平和について直接的に語りかけることは、これまであまり見られなかったように思われるが、最近の世界の情勢を見るにつけ、こうした視点も不可欠であるとつくづく感じる次第である。発想の飛躍と受けとめられるかもしれないが、戦争というものを政治や宗教だけの問題としてではなく、野生生物への脅威という視点からとらえ直してみることの意義にも大きいものがあると確信する。そして、そうした観点に立って、取るべき行動の指針を再検討すべく、自らも問い直していきたいと考えている。

なお、アメリカ各地における炭疽菌によるテロ行為をはじめ、生物兵器の問題が大きくクローズアップされるようになってきているが、野生生物保護を進めようとする時、こうした現状はこの上なく悲惨であると言わざるを得ない。人間の愚かな面をつくづく思い知らされると共に、やり場のない、いたたまれない気持ちにさせられる。が、それ故になおさら、明るい未来を信じずにはいられないのである。



イスラエルとヨルダンの国境地帯

編集後記

大変遅くなりましたが、65号をお届けします。

最初の研修会報告ですが、本来ならテキストを掲載し、その上で解説文を付すのが筋ですが、紙面の都合で解説文のみ掲載しました。テキストは次号に掲載する予定です。

歌集『白鳥聖歌』の著者である村本義雄氏には本会顧問をお願いしています。氏は長らく㈶日本鳥類保護連盟石川県支部長をお務めになり、野鳥保護と愛鳥教育の推進に御尽力くださっています。かつて能登に朱鷺が生息していたときの保護活動、そして今日の中国の朱鷺の保護活動での御活躍は、知る人ぞ知るめざましいものです。

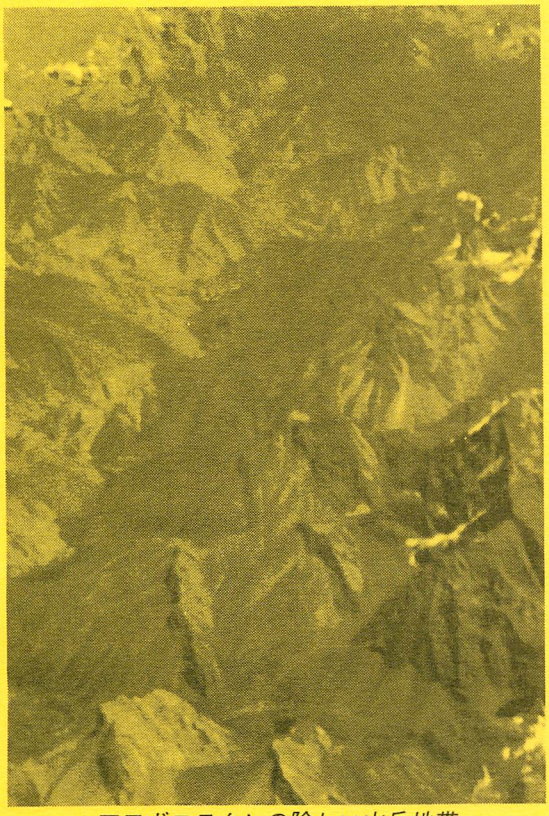
私もかつて石川県に村本氏を訪ね、朱鷺が生息していた山や田んぼを御案内いただいたことがあります。

「私は、ここに再び朱鷺が憩い、舞えるようにしたいのです。そのような自然を取り戻したいのです。」

とおっしゃる氏の熱く深い思いに感動したことを今も鮮明に記憶しています。

この歌集の収益は朱鷺保護活動のために使うことを名言していらっしゃいますが、朱鷺だけでなく野鳥をはじめとする自然についての氏の深い造詣と思いが伝わってきます。ぜひお読みください。(染谷)

アフガニスタン



アフガニスタンの険しい山岳地帯

愛鳥教育 No.65

平成14(2002)年5月31日

発行人　杉浦嘉雄
発行所　全国愛鳥教育研究会
住　所　〒166-0012 東京都杉並区和田3－54－5
第10田中ビル3F
㈶日本鳥類保護連盟内
電　話　０３－５３７８－５６９１
ＦＡＸ　０３－５３７８－５６９３
会　費　３,０００円
郵便振替　００１８０－７－１２４４２
印刷所　祐　文　社